

【鉄の話】 ポストコロナの新時代 ポストコロナの社会構築理解のために **【3】**

胸に輝く“カラフルなドーナツ型バッジ”の正体 よく知りませんでした



2021.5.1. Mutsu Nakanishi

テレビを見ていて、国会議員や財界の偉い人などが胸につけているカラフルなドーナツ状のバッジに目が留まり、なんだろうと。街でも見かけたことがある。

多分 東京五輪・パラリンピック関係か、ライオンズクラブやロータリークラブみたいな団体のバッジだろうと。それにしてもカラフルだ。こんなセンスなかなかないと思うのですが、それをつけている人物・・・と。ところが、Amazon で売っているのをみつけ、また、ほかでも・・・。

これはいったいなんと。

みんな知ってる「SDGsのバッジ」だそうだと。また英語か…でも 誰でも知っているという。

2015年9月に国際連合加盟国が採択した

「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals)」を指す「SDGs」のバッジだと知りました。

そんなふるくからあるのか？

最近コロナが流行しだし、政府が低酸素社会・持続可能型社会を目指すと言い出してから、急によく見かけられるようになった。

小学生の孫たちがやってくる、「SDGs」のバッジやと呪文のよ

うに目的を唱える。学校でみんな習っているのだそうだと。私だけが知らなかったのかもかもしれませんが・・・。

■ 2015年9月に国際連合加盟国が採択した持続可能な開発目標 17項目 インターネットの検索より

国連広報センターや外務省のホームページの記述によると、その決議採択の狙いは、

《 あらゆる形態の貧困に終止符を打ち、不平等と闘い、気候変動に対処しながら、誰一人取り残されないようにするため、2030年までにこれら17の目標を達成することにある 》
17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

バッジがカラフルなのは、この17の目標を17色で表現しているため。

持続可能な開発目標 「SDGs」 (Sustainable Development Goals) 17項目



でも胸につけているえらい人たちはみんなバッジ 17 色の色の意味を理解されているだろうか.....

「カラフルでええなあ」だけでははいかんですが.....

これ知らなかった私の 負け惜しみです。

コロナ禍の中で、いろいろほころびが見えてきた日本。Post ポストコロナの新時代、日本の社会や働く現場を活力あるものにすることに、誰もが目を向けるべきヒントが持続可能な開発目標 (SDGs) の中に数多く含まれていると。

国連広報センターや外務省のホームページには下記概要記述がありました。 ご参考まで

「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals)」2015 年 9 月に国際連合加盟国が決議採択

- 持続可能な開発目標 (SDGs) について

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html>

- 持続可能な開発目標 (SDGs) 達成に 向けて日本が果たす役割

SDGs を通じて、豊かで活力ある未来を創る

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/sdgs_gaiyou_202103.pdf



JAPAN SDGs Action Platform

日本の取組 外務省のページより

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html>



令和3年3月 外務省 国際協力局 地球規模課題総括課がまとめた日本の取組について示した立派な資料があり、2021 年の取組についても立派にまとめられている。

持続可能な開発目標 (SDGs) 達成に 向けて日本が果たす役割

SDGs を通じて、豊かで活力ある未来を創る

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/sdgs_gaiyou_202103.pdf



- 普遍性** 先進国を含め、**全ての国が行動**
- 包摂性** 人間の安全保障の理念を反映し「**誰一人取り残さない**」
- 参画型** **全てのステークホルダーが役割を**
- 統合性** 社会・経済・環境に**統合的に取り組む**
- 透明性** **定期的にフォローアップ**

そして、これらに向けて、政府関係機関のみならず、地方自治体・企業・学校・各種団体そして個人が参加し、その意志表明がこのカラフルなバッジだそう。インターネットを調べるとバッジのアレンジ変更は認められていないが、取組意志があれば、自由にこのバッジを採用PR その他に使えるようだ。ホームページにも意匠デザインのアレンジ・書き加え等変更しなければ、このバッジを使うことができるようだし、インターネットには高級品から500円程度の価格で、このバッジが売られ、またこのバッジ・意匠を使った印刷等作成の広告サイトもいくつも出ている。商業主義が見え隠れ。

この取組に賛同、私をはじめ、それぞれが取組まねばならぬ目標だと意識しますが、誰一人取り残すことなく安定した持続社会形成には 達成目標がこんなにあるのか…とまた、実践行動を起こすうえでの共通認識も明確にされている。自分自身が知らず知らずのうち、無視・切り捨てていると頃もたくさんあるようだ。でも、これがポストコロナの時代の世界標準なのだ。この項目を見て、自分の行動を見つめなおす良き機会である。日本にも同じくそれが言えるだろう。・・・????である。今の日本 プランは立派でも、行動の中身となると……………。

今 コロナ禍のなかで、低炭素社会構築が叫ばれる経済プランが大々的に発表され、企業イメージを高める取り組みが始まっている。そのキーワードは カーボンニュートラル 持続可能な社会への取組だ。でも一方で、弱者が切り捨てには目をつむっている現実。今一度考えねば……と。日本ではいつも形・枠組みばかりで、そこで暮らす人たちへの取組がなおざりになっているように見える。このSDGsについても目標のトップに「あらゆる形態の貧困に終止符を打ち、不平等と闘い、誰一人取り残されないようにするため」と明記されている 17項目達成の 一番大事な理念であろう。これが忘れられては何にもならない。

コロナ禍の昨今の日本の社会のほころびを見るにつけ、自分の意志表明しての取組として、バッジをつけて歩くことも大事ですが、持続可能な開発目標 (SDGs) の中身を紐解いてみることも大事だと。行動のないプランは絵に描いた餅 心せねばと思い、自戒を込めて、お知らせした次第です。

今日本が置かれている立場 トップを走る物づくり日本の脱落が鮮明になり、中間層の著しい縮小と格差急拡大が現実の社会問題に日本再生には物づくり現場の原点復帰(機械が働く現場から人がはたらく現場へ)の再生と雇用不安の解消日本で帰結する新しいモノづくり革命 新産業現場の創生・日本の中での雇用拡大と中間層の早期拡大機械が働く現場に目を向けるグローバル・大企業ばかりに目を向ける社会からの革命的転換、日本の地域経済の復活とまとめる人もいる。**日本の中で、日本の現場を活力あるものにするに目を向けることが大事とそんなヒントが持続可能な開発目標 (SDGs) の中に数多く含まれていると。**

またSDGsバッジからの勝手な年寄りのブツブツ お許しください。でも、コロナ禍の中で見えてきた日本のほころび今一度 立ち止まって じっくり考えてみたい。

2021.5.1. From Kobe Mutsu Nakanishi

今月のFrom Kobeに今の現状に本を考える記事収録していますので、ポストコロナにむけての記事参考に添付

参考 From Kobe 新緑の5月収録より

1. ■ コロナ禍の中で 大音響の五輪PR隊 約800m 聖火ランナーは脇役か？

下記にインターネットに掲載された写真と五輪聖火リレーに関する記事を示す。

垣間見える商業五輪の醜さ スポンサーで成り立つ聖火リレー

2021年5月3日 06時00分 東京新聞



聖火ランナーを先導するスポンサー企業の車列＝三重県伊賀市で

47都道府県で人口が最も少なく、県内総生産も最小の鳥取県。

平井伸治知事（59）が、首都東京の五輪の聖火リレーを「アメリカナイズされた大騒ぎ」と評している

◆派手な車列に大音量の音楽 東京基準は非合理的

聖火リレーは、約30台の車列が約800メートル続く。ランナーを先導するのは、大会スポンサーとなった企業の大型宣伝車。大音量で曲を流し、車上のDJ（ディスクジョッキー）が興奮を盛り上げる。

新型コロナウイルスの感染拡大のさなか、有名人ランナー目当てに集まる人々に企業がグッズを配り、群集の「密」も生じた。

4月、本紙のインタビューに応じた平井知事の口調は穏やかだが辛口だった。

東京・秋葉原で生まれ育ち「東京の感覚は分かる」とした上で、「全国のリレーを東京基準で作るとするのは合理的ではないのではないか」「地域になじむやり方がある」「商業主義と五輪の理想の調和を保つべきだ」と説いた。

でもこんな風に五輪聖火リレーが行われているなどテレビにも大新聞には全くでていない。

特にNHKは 毎日聖火リレーの様子を報道するが、こんなどんちゃん騒ぎの隊列が延々800mも続くという。

まったくのハウカムリ。コメントもなにもなし。 何ででしょうか……………

聖火ランナーが聖火を粛々と800mも後でまるでトカゲのしっぽが如くに走ってゆく。

オリンピックの理念も当初東京五輪の目的「復興五輪をテーマに日本を世界に示す」とした内容もまったく示されぬまま、大音響の隊列はお祭りもりあげ隊 自己宣伝隊。まるでカーニバルの隊列としか考えぬ大隊列が進んでゆく。

オリンピックの精神などそっちりけの隊列だという。いわゆるお上に逆らわぬ昔の大名行列のお通りだ。

これが令和の日本の現状だ。しかもコロナ感染が拡大するさなかである。

スローガンと行動が全くかけ離れた商業主義の隊列が行く。もう口あんぐり。こりゃ 誰もついてゆかんわと。

もう 五輪は中止したら……………と。 2021.5.3 by Mutsu Nakanishi

元京大総長 山際寿一氏のオピニオン

地球環境問題がいろいろ論議されている中で あまりにも利己的な近視眼的視点が中心ではないか 現代人が忘れ去り、無視してきた豊かな自然都人との絆 元京大総長 山際寿一氏のオピニオンです 2021.4.28. 神戸新聞 朝刊 13面【オピニオン】言論より

豊かな自然と人との絆、故郷を選ぶ基準に

現論

総合地球環境学研究所長

山際 寿一



やまぎわ・じゅいち 1951年生東京生まれ、京都大学大学院博士課程修了。アフリカ各地でゴリラの野外研究や保護活動に取り組む。国際霊長類学会会長、京都大学長、日本学術会議会長などを務め、4月から現職。著書に「家族進化論」、「ゴリラからの警告」など。

地球環境問題はますます深刻度を強めている。干ばつと異常な豪雨、山火事など、とりわけ日本は自然災害に苛まれやがてい。その原因が地球の平均気温の上昇にあることは明らかで、日本もようやく重い腰を上げて、2050年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにすることを宣言した。

しかし、再生可能エネルギーへの転換や電力システム改革など、表現への道は険しい。プラスチックの利用規制や食品廃棄物の減少などの課題もある。これらを法や制度の規制だけで乗り切れるとはとても思えない。

消費と生産変える

唯一の解決策は、現代の大消費・大生産の傾向を変えることである。現代の自由主義経済は科学技術は個人の欲望を発揮させ、その能力を拡大する方

向へ人々を導いてきた。その結果、個人はバラバラになつて頼るべき人々の輪定、保険や社会制度などに頼るしか自分や家族を守れなくなつてい

る。さらに、戦後ずっと人々の労働と暮らしを支えてきた産業が様変わりし、生涯にわたって身を預ける組織ではなくなつてきた。

明治以来、立身出世を自指して都合に出た苦言を聞き受け、血縁も地縁も薄くなつた人々をつなぎとめてきた絆も、までも崩壊しようとしているのである。根無し草のようになつた人々が自分の利益や安全しか考えず、互いに非難し合つて生きていくようになれば、日本全体で環境倫理を推進していくような事業は不可能になる。いったい私たちはどこに自分のアイデンティティーを求め、何を指標未来を構想したいのだから。

この正月、久しぶりに山屋三善という詩人の「アミニスムという希望」という書を読み返してみた。1970年代に私が鹿

児島島の屋久島でニホンザルの調査を始めたころ、インド放浪の旅を終えて家族で屋久島の山中に居を構え、畑を耕しながら詩作に励んだ人である。屋久島の自然と文化を未来へ残そうと一掃に勉強を始めた。

当時、三善さんは「部族」という団体を立ち上げ、自然と共生できる新たな暮らしを構築していた。この本は彼がしくなる

2年前の99年に、琉球大学で5日間わたつて行った講義の記録である。読んでみて、今の時代にひびくことが書かれているのに気づいた。

故郷となる場所

三善さんは、士をともに生き

た、と書く。士は地球そのものであり、生物が地球といつしよに作ってきた共同の財産でもある。そこに森羅万象が宿る。そのなかに自分の好きなものができるとき、それがカミである。美しいもの、喜びを与えてくれるもの、安心を与えてくれるもの、聖めを与えてくれるもの、畏敬の念を起させるもの、そういうものは何でもカミであり、現代においてもそれはいささかも変わらない。

それらのカミと自己が調和して一つに融合した時に、まごとの自分が現れる。それを見つけて出していくのが万物に魂が宿ると考えるアミニスムの新しい時代の形だと言っている。三善さんがかつて日本を活動

をともにした米国の詩人ケリー・スナイダーは、その後、カリフォルニア州のシエラネバダ山中に住み、バイオリジヨナ

リスム(生命地域主義)を実践し始めた。三善さんと同じように、好きな土地を決め、その土地を構成するすべての生き物と共生するコミュニティをつくり上げようとする活動だ。

屋久島では三善さんの志を継いで暮らしている人たちがいるし、スナイダーもロサンゼルス郊外の河川流域に活動の輪を広げている。それは、これからの時代にそ通じた生き方もしれない。

新型コロナウイルスによる感染症でこの1年、私たちは地域に籠つて暮らしてきた。果たして、それが自分の好きな場所であること、カミが宿る場所であることを確認できたのだろうか。これからの時代は、人々が新たに自分の故郷となる場所を見つけて出すことになる。

労働条件や親族の絆だけが住む場所を決定する要件ではない。豊かな自然と安心を与えてくれる人々とのつながりが新しい基準となる。環境倫理はそれを求める過程で必然的に心に宿る。新しいアミニスムがその鍵を握っていると思ふ。

◇敬称略。原則毎週木曜日に掲載します。